

# 火星

平成二十五年九月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

眇に凌霄零れつぎにけり

へうたんの花に風立つ四天王

かけがへなき音に苧殻を折りにけり

胡麻を炒る音のつかのま盆の雨

念仏の染みたる桃を剥ぎにけり  
盆過ぎの干潟に万と雨の粒  
肉食<sup>じき</sup>のあとの扇を置きにけり  
若松にととのふこころ水の秋  
秋の夜の入ってみたき壺ひとつ  
踏切のすぐそばの家秋の暮

# 太白星

記念碑の一字が読めず青岬  
緑蔭の人力車に声がけられし  
夏の月川舟低く括られて  
アマリリス予報通りに雨となる  
形代に書きし歳におどろきぬ  
雨止みしいろに形代流しり  
苦瓜の苗きげんよき両隣

杉浦典子

浜口高子

葎切の裏声に水はたと暮る  
遠雷に白粥の蓋ずらしけり  
皆去んで子子夕日に跳ねにけり  
引き潮のあとの石ころ夏の月  
水打つて青き香の立つ鬼灯市  
萍の流れの形に干涸びし  
山車廻す地に念ひ込む男足袋

# 火星作品 山尾玉藻選

梅挽ぎしあとひろびろと座りゐる 宝塚蘭定がず子

浅沓の音にはづしぬサングラス

炎天や担がれゆける萱の束

米を磨ぐ夫に守宮の出できたり

でで虫のつめたき道をひきずれる

一湾の彼とがりをり小鳥の巢 大和郡山城 孝子

山鳩が雲呼びにけり更衣

雨傘をさせば浮巢の見えてきし

青葉木菟いよよ貧しき乳房ふく

六月の風をあつめて鴉発つ

神の田の水口越ゆる根無草 八幡大山文子

学校の声這ひ上る梅雨の山

がくれ滝現るる夏越の男山

札深く御田祭の始まれり  
巫の脛の映りし代田かな  
下闇に火の粉散らしぬかがり守  
かはせみの木杭涼しく残りけり  
デパートのだがし屋に立つ捕虫網  
花嫁を待つ青芝のピアノと椅子  
ちちははの大言海を曝しけり  
昼寝覚胸に日の斑の揺れてゐし  
振花を摘めば素直な束となり  
飾り馬をあふぐふたりの大団扇  
夕螢笹舟流れきたりけり  
茶晶の末広がりを大夕立  
老鶯や源流ちかき橋わたる  
もろ手の荷茅花流しに置きにけり  
実梅落つかはたれどきのいろ尽し  
夏至の夜の居留地の扉を押しにけり  
山蟻に荒し靴あと轍あと

八幡坂口夫佐子

宝塚山田美恵子

小林成子

# 選のあとに

山尾 玉藻

梅挽ぎしあとひろびろと座りゐる 蘭定かず子

梅を挽ぎ終えたこととひろびろと座ることに何の因果もない。しかし爽やかな香りを楽しみながら実梅を挽ぐ仕事を終えるとゆつたりとした充足感を覚えるものである。その思いが手足を伸ばしてくつろぐ思いに自ずと繋がったのである。

雨傘をさせば浮巢の見えてきし 城 孝子

水辺を散策していて雨が降り出したのだろうか。傘を広げた瞬間、蘆の根元の「浮巢」が見えたのだ。思いがけない出会いに目を瞠る作者。この句も「傘させば」と「見えてきし」を因果ではなく偶然が呼んだ必然として味わいた。そこがこの句の旨味。

神の田の水口越ゆる根無草 大山 文子

田植を終えた神の田であろうか、根無草が水口を静かに漂い出て行く景。そのまま神の田に留まっていれば良いものかと、定まらぬ身上的根無草を思う作者の心情がそれとなく窺い知れる。

花嫁を待つ青芝のピアノと椅子 坂口夫佐子

挙式を終えた新郎新婦を祝う宴が庭園で始まろうとしているのだろうか。青芝にセットされたピアノと椅子は真つ白のものに違いない。その場に集まった人々の明るくハッピーな声

が溢れる。

昼寝覚胸に日の斑の揺れてゐし 山田美恵子

当然のことながら昼寝は涼しい日陰でするもの。しかし目覚めた今、胸に日の斑が揺れている。とすると随分長い間寝てしまったことになる。作者は独り取り残されたような気分になり、急にこころ細くなった様子である。

実梅落つかはたれどきのいろ尽くし 小林 成子

まだ明けきらぬ暁、実梅が落ちる瞬間を切り取った句。その実梅は薄暗い中でもそれと知れる美しい緑を堪えながら落ちたのだ。その景を「かはたれどきのいろ尽し」と的確にそして十分に言い得た。

落し文ゆつくり開きこなな虫 山本 耀子

「落し文」などと洒落ではみても所詮は小さな甲虫の卵が孵った幼虫がひそむ巻き葉、などと野暮なことを俳人は決して言わない。ユーモアという味つけをしつつ遠回しに柔らかく皮肉る。

母の前に湯呑もち寄る麦の秋 深津 鱻

故郷の母の許にうから等が集まったのだろう。久し振りに高齢の母の様子を確かめ話を聞こうと、誰からともなく母が座す前に寄って来るのだろう。「湯呑もち寄る」に実体がある。

(以下略)



# 恒星巻

大山 文子

夏蝶の纏れ半旗の高さまで  
切幣の水のあはひを水馬  
柏手のにぎにぎ応ふ京蛙  
神主が畦で着替へる朝曇  
山雨急茅の輪内外けぶりたる

飯塚 糸子

奥田 順子

かはほりに底ひの浅き玄武洞  
青草の匂ひをとばすブルドーザー  
亀の子に途切れてゐたる拌み石  
蟬生まれけり金丸座の幟  
寄せ書きの色紙の上に緑立つ

橋立一号終着駅の赤カンナ  
明易の畦ととのひし与謝郡  
ハイウェイの影が貫く代田かな  
峰雲へアクセルつよく踏みにけり  
山蟻や戒名のなき墓所

伊勢 きみこ

渡辺 数子

大池のすきまもあらず蓮の花  
青梅雨の通りぬけする京都御所  
ざんざんと音たかかりし五月雨  
麦味噌のよくにほふなり梅雨じめり  
家ごとにすこしく違ふ四葩かな

神官の影を踏みゆく羽抜鳥  
木洩れ日をつつく外なし羽抜鳥  
青梅雨の墓に寄り添ふ比翼句碑  
葉桜や木枯句碑に影生まれ  
神父さまの眼鏡きらりと揚羽蝶

# 獅子座

山尾玉藻推薦

田中文治

姨捨の空へ吹き上ぐ青田風  
日当りて水の色なる心太  
谷底へつづく石段早梅雨  
順礼の夏野の風をはらみゆく

井上淳子

梅挽ぐや最後大きく枝揺すり  
少年の並んで掃ける夏落葉  
藤の豆引けば棚より昨夜の雨  
味噌部屋の梅雨冷つたひくる腓

中尾安一

琉金を水の引つ張り合ひぬたり  
金亀子とび来し音を仕舞ひけり  
葉から葉へでむし渡る途中なる  
牛蛙の声の中なる闇青し

涼野海音

わが声の大きかりけり夏蓬  
カーテンの風にふくらむ更衣  
よく動く麦藁蛸の頭なり  
黒揚羽天文台の空より来

西村節子

時鳥の一声に雨上がりけり  
爪立ちて昼月仰ぐ羽抜鳥  
ほととぎすの渡りの途なり茶白山  
甘酒屋の奥の翁の手まねきす

西畑敦子

おはやうのこゑかけられし羽抜鶏  
垣越しに吃々あゆむ羽抜鶏  
ふる里は城下町なり鮓漬くる  
ボランティアのすぐ集まり来冷し瓜

助口もも

幼児の手をつなぎ来る金魚玉  
子雀の弾みやまざり城育ち  
くちなしの香の昏れてゐる奈良ホテル  
そつとしておきませいよとかたつむ